

山内マリコ 『ここは退屈迎え に来て』、『あのこは貴族』 からみる地方女性の閉塞感

12110152 森川萌愛

問題の所在

近年、地方若年女性の東京への転出が問題となっている

【原因として考えられていること】

- 女性の高学歴化に伴うキャリア志向の上昇
- 都会への憧れ
- 地元や親元から離れたたい
- 地方の閉塞感

→地方の閉塞感に着目

研究目的・方法

【目的】

- ・ 地方女性の閉塞感の原因について考察する

【方法】

- ・ 山内マリコの著作『ここは退屈迎えに来て』、『あのこは貴族』を分析。適宜、著者のインタビュー等も対象にする。

山内マリコについて

- 1980年 富山市生まれ
- 2008年 「十六歳はセックスの齡」で「女による女のためのR-18文学賞」読者賞を受賞
- 2012年 同作を含む連作短編集『ここは退屈迎えに来て』でデビュー

『ここは退屈迎えに来て』

- 山内マリコのデビュー作
- 2012年幻冬舎文庫より刊行
- 8編の短編からなり、地方都市を舞台に女性たちの生きざまが描かれる。
- 舞台について作中で明言されていないが、著者のインタビューで富山がモデルであることが明かされている。
- 全体を通して均質化した地方都市の憂鬱を描く。
- 2018年に映画化

『あのこは貴族』

- 初出 「小説すばる」 2015年10月号～2016年7月号
- 2016年集英社より刊行
- 2021年に映画版が公開

【あらすじ】

地方から進学を機に上京した美紀と、東京で生まれ育った箱入り娘の華子が共通の知人男性をきっかけに出会い、互いに影響を及ぼしあって変化していき、新たな人生のスタートを切る。

地方女性を取り巻く現状：二重の疎外

- 地方女性→都会（東京）からの疎外・男性からの疎外
→二重の疎外

寺町（2022）によれば、地方女子は大学進学に際して「地方」と「性別」の二重のハードルがある

【考察】

こうした疎外が地方女性の閉塞感の要因の一つ？

「地元つながり」と女性

- 地元の共同体における繋がり「地元つながり」
- 『ここは退屈迎えに来て』作中で高校生たちがゲームセンターでたむろするシーンが回想として挟まれる。その記憶は主人公（女）にむとつては輝かしい青春の記憶であるが、中心的人物であった男はその場に主人公がいたことを憶えていない。
→共同体における女性の存在感の薄さ

【考察】

「地元つながり」内での女性の立場の不安定さが閉塞感の要因？

「夜職」（よるしょく）と女性

女性が「地元つながり」から離れて一人で生きるとき

奥貫（2023）によれば、困窮する女性は男性と異なる行動をとる。典型的な選択肢として「夜職」に従事することを挙げている。

・『あのこは貴族』では主人公が実家からの学費の援助を絶たれ、ひとり東京で生きていくために夜の仕事を選擇する様子が描かれている。

【考察】

「地元つながり」資源のない女性の生活の過酷さが閉塞感に繋がっている？」

結婚と女性

【結婚＝幸せ？】

稲葉（2002）によると、結婚は男性に大きな心理的メリットをもたらす一方で、女性ではその傾向は小さい。

男性にとってはサポート資源を受ける貴重な機会となるが、女性にとっては必ずしもそうではない。

結婚と女性 ②

- ・『ここは退屈迎えに来て』の内の1編、「やがて哀しき女の子」において描写される結婚していない女性に向けられる奇異の目
→「結婚＝幸せ」の価値観

【考察】

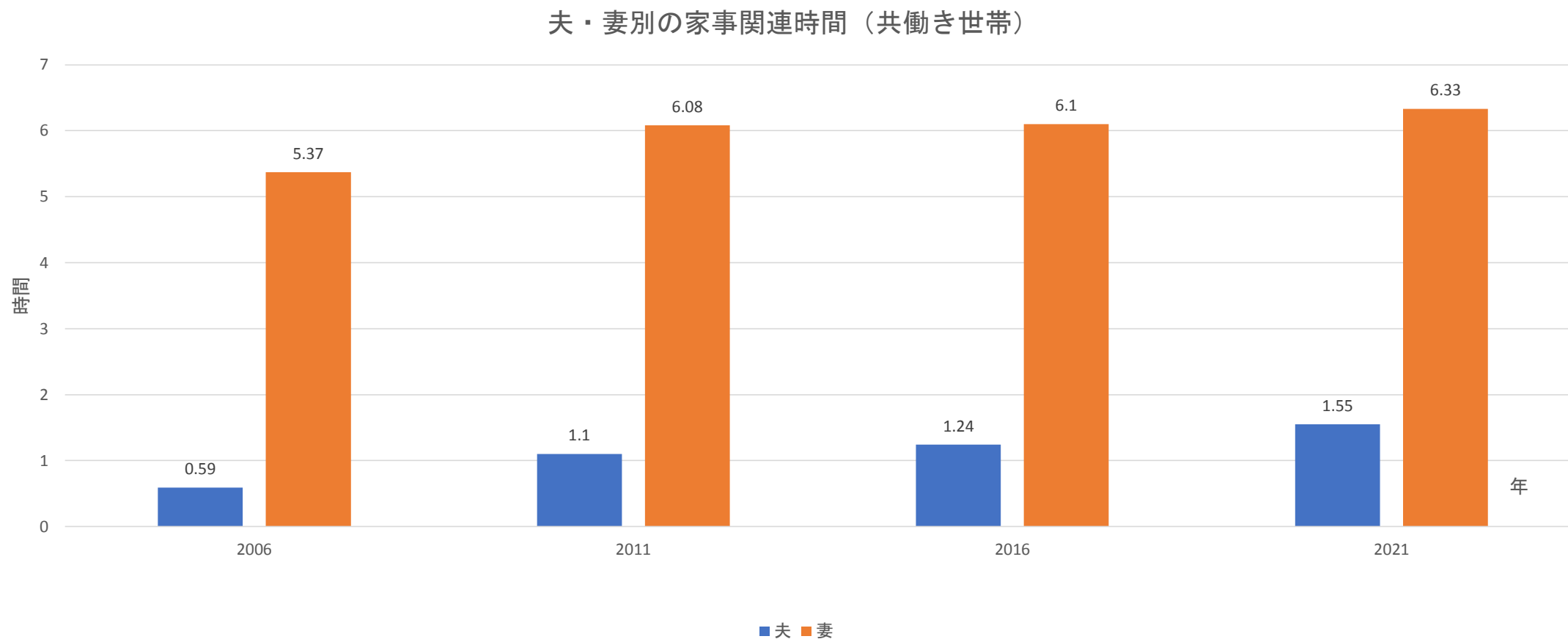
（実態はそうと限らないのにも関わらず）「結婚＝幸せ」の価値観が蔓延し、そうした考えを含む世間の目に晒されることが閉塞感に繋がっている？

手段としての結婚

- 杉田（2018）によると、結婚は「学歴が低く不安定な就業状況にある女性たちにとっては、 展望の不安定さから抜け出す手がかりとして位置付いていた。」
 - 「やがて哀しき女の子」の主人公である「あかね」は「社会保険なし恋人なし未来なしのフリーターという、この寄る辺ない不安定な状態」から脱するために結婚を望む
- 不安定な立場からの脱却する手段としての結婚

→結婚は女性にとって本当に有効か？

現実の問題：夫婦の家事関連時間の差



結婚の憂鬱

- 多くの家庭で、共働きであるにも関わらず家事関連時間は妻の方がかなり多い
- 「やがて哀しき…」のあかねも、無償で夫の会社の経理をさせられ、家事労働も負担させられている

【考察】

不安定な立場からの脱却を狙って結婚しても、無償の労働力として不当な扱いを受けるといった可能性が閉塞感に繋がっている？

家と女性

- 『ここは退屈迎えに来て』内では、家族に頼って生きる女性たちの様子が描かれている。
- 一方で、無償の労働の負担する可能性もある。男女共同参画白書（平成27年度）により、ヤングケアラーの実態に関する調査（平成30年度）によれば、ヤングケアラーの負担が女性に多く、女性にケア労働の負担がかかっている現状。

女性にとって「家」は安全基地になることもあれば、逃れがたい牢獄となる場合もある

考察

地方女性の閉塞感とは、

- 「地元つながり」における立場の不安定さ
- 「地元つながり」資源を失ったときの過酷さ
- 「結婚＝幸せ」の価値観による窮屈さ
- 不安定な立場からの脱出方法としての結婚という憂鬱

によって発生しているのではないか

問題点

- 現実の女性の問題を語るときに、架空の物語である作品を分析対象とする意味が不明瞭である。
- 統計など実際のデータを使った議論が少なく、根拠に乏しいと思われる。

参考文献

- 寺町 晋哉 2022. 大学進学における「地方」と「性別」の「足枷」.
学術の動向27巻10号 p.10_76-10_83
- 稲葉 照英 2002. 結婚とディストレス. 社会学評論. 53巻2号 69-84
- 杉田 真衣 2018. 東京に生きる若年女性のキャリアー空間的移動に着目してー教育社会学研究. 102巻 p.125-144
- 総務省統計局我が国における家事関連時間の男女の差～生活時間からみたシエンダーギャップ～
- 男女共同参画白書 平成27年版
- 三菱UFJリサーチ&コンサルティング ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書
- 大貫恵佳・木村絵里子・田中大介・塚田修一・中西泰子 2023.『ガールズ・アーバン・スタディーズ』法律文化社